

長崎研修の旅「原城懐古」

宮下良明

(会員 佐伯市古江)

去る十月十四、五日、長崎研修の旅に参加した追想を少し述べてみたいと思う。

オランダ船リーフデ号、豊後漂着(佐伯湾唐船婆説)以来四百年目に当る。漂着が発端となつて、日蘭交流が始まり「長崎市出島」にオランダ商館等の建物が並び、両国の関係が深まることになる。

正に長崎揚げて日蘭修好四百年の祭を見学した。関係する内容を詳細に説明はできないが、意義多き快適な第一日であった。

リーフデ号共有の歴史を持つ長崎には、先年にも佐賀を經由、平戸「松浦水軍」縁の城を見学した。流石に一世を風靡した海の支配者、城の規模もさる事乍ら、そ

の史料、遺品等水軍に相応しい物であったと記憶している。

さらに見下す地に眠る、リーフデ号乗組員ウイリアム・アダムス(日本名、三浦按針)の墓に巡り会い、感激の旅を今猶忘れ難い。これも小野氏の計らいであった。

リーフデ号漂着の論文は、故村井強氏が史談数字に互つて、アダムスの手記に適合した研究を発表、史実を追求する大切さを後世に残した事は御承知の通り。

さて翌十五日、二十名の一行は、弥生町御手洗幸雄氏に運転を託し、長崎市を後に島原半島へ。諫早市を過ぎ、雲仙天草国立公園、橘湾へと越す。景観を眺め乍ら小浜町より雲仙山麓の山路へと入る。此の街道地帯は九州有数の馬鈴薯の産地、此処を下ると島原半島の突端に近く天草の島々が目前に広がる、いわゆる有馬の地である。

成程、天草灘から早崎の瀬戸に乗り、島原湾を通過、有明海に至る海上航路を取締まる最適の位置である。う駒崎鼻に原城跡が展開されていた。

天草四郎時貞を將に頂いたキリシタン一揆の籠れる、城の構造・規模が示す要害堅固さは、小野氏の説明でう

なすける。

次に小野氏に戴いた資料を頼りに、原城に関連する切支丹武将達の数奇な運命を述べてみたい。

一、原城と有馬氏

右の築城記によると明応五年（一四九六）と記す、今を去る五百年の昔、有馬氏第八代有馬貴純が築いたと云われる、別名日暮城とも云った。

有馬氏の祖先は、日本歴史、天慶の乱（九四一）で反抗した、伊予の據（国司）で有り乍ら、日振島（宇和島市）を本拠地にして、穂門郷佐伯院太宰府等に、押入つて、源経基なる追討使に捕まった、海賊の長「藤原純友」の後裔と云われ代々海人の血統である。

六代経純の時、鎌倉幕府より肥前国有馬荘の地頭職（荘園という所領の実質的支配者）に補任されてより有馬氏を称した。

戦国の時代、鳥原一円を不動のものにした有馬晴信は、洗礼名ドン・プロタシヲと云った。

大友宗麟、高山右近、黒田如水、古田織部、小西行長、細川忠興、多くの戦国大名と共に切支丹信者として

有名であったと史料は語っている。

いずれにしても、自領内に根強い信仰心を植付けた事は当然の成行と考えられる。

さらに慶長二年（一五九七）朝鮮出兵の際は、二千人の信者等を率いて渡海している。次の陣立書参照。

○中川家文書七四号陣立書

中川家文書	
陣立 三番	七四 豊臣秀吉高麗陣立書写 慶長貳年二月廿一日 御朱印 三番
三、七、五、八	老万人 加藤主計頭 此内八千人二百名信者 非番八二番二可備也
七千人	小西撰津守
千人	羽柴劉馬侍従
三千人	松浦刑部卿法印
貳千人	有馬修理大夫
千人	大村新八郎
七百人	五嶋大和守
四、五、八	合老万人
三、七、五、八	黒田甲斐守 毛利老將守 同 豊前守 嶋津又七郎 高橋九郎 秋月九郎 伊藤民部大輔 相良宮内大輔
三、七、五、八	合老万人
三、七、五、八	三、七、五、八

上述した晴信の子が有馬氏第十四代直純でキリシタンを

改宗、其の後、慶長十九年(一六一四)日向国あがた県(延岡市)領主として転封され、さらに越後丸岡領に国替くにがえ、代々明治期に至るまで栄え、子爵となった家系である。

一、小西行長

行長は大阪堺の豪商、小西隆佐(教名ジョアチン)の子で、父子共に熱烈なる切支丹信者であったと云う。行長の教名は、ドンアグスチンと云った。商人の身で戦国大名までに上った背景には、初めは名門、宇喜多氏の家臣であったが、豊臣秀吉にその才能と戦略手腕を認められ側近となった人物である。

その複雑なる一生の側面を述べると、天正十四年(一五八六)豊後国主大友宗麟は日向に出兵、島津との戦に敗れ、秀吉に助力を請うた。翌十五年に至り秀吉は自ら九州平定に乗出し、島津氏を降して九州を征服した時から行長と九州の繋つながりがが生まれてくる。

翌十六年、功労者、越前(福井県)の武將佐々成政に肥後一国を与えたが、成政は、肥後一揆の鎮定に失敗、秀吉の勘気に触れ自殺した。成政の後を受継いだのが鎮圧に成功した小西行長、加藤清正である。以後、熊本城に

清正、宇戸二十四万石に行長が配される。

行長は宇戸城にあつて天草諸島を領有、自らのキリシタン信仰を領民に広めたと云う。慶長二年(一五九七)朝鮮の役には天草諸島合わせて七千人が従軍(陣立書参照)。この時の事件が原因で、大友義統(宗麟の子)が豊後国を没収されることになる。

慶長五年(リーフデ号漂着の年)関ヶ原の戦が始まり、西軍についた行長はその敗北により、京都三條河原において打首となった。

行長の遺臣達が農民と共に原城に立籠り、幕府と対決したのは単なる信仰上の次元ではない。以上、小西行長の一面を述べた。



一、天草四郎時貞の出自
本名益田四郎時貞、父は益田好次と云い天草本渡の人、祖父を天草本渡城主、

天草種元(教名ジョアン)と一説に云う。父は(ミゲル)、

豊臣秀吉九州征伐の功勞で天草本渡城を安堵。

文祿の役では、小西行長の指揮下で活躍した武将の家柄と云われている。

寛永十四年(一六三七)十月、時の島原領主板倉重政は有馬直純の後を受継いだ。重政は切支丹を弾圧、自ら一揆の立籠もる原城に打入り戦死した。また、寺沢堅高は天草四万石を領し、天草一揆の鎮定の緩慢さを幕府から問われ自殺、家名断絶となった。以上、両領主の圧政が原因とも云われ、十六歳四郎時貞を城主に立てた、切支丹浪人、農民合わせ三万七千人と云う人々によつて起きた戦いを島原の乱と云っている。

これを境に幕府は切支丹の探索が更に厳しさを増し、宗門改め、踏絵かみえの制等、過酷なまで弾圧することになる。

以上、駄文を述べてみた。次に原城の想い出及び海との関係を少し連想してみた。

一、原城懐古

幕府と対決して散った多くの切支丹信者が眠る古戦場には、幾つかの供養塔と石仏が散見されていた。海を見

渡す、天草四郎時貞の巨大な像、その童顔を見上げる見学者の周辺には一抹の哀れさが漂たなっていた。



次の歌は「文部省」と南

有馬町教育委員会の原城跡の説置版に記す歌である。

痛ましき 原の古城に
来て見れば

ひともと咲けり

白百合の花

「新村 出」

今日、広辞苑を手にする
度に、編者「新村 出」博

士の右の歌を思い出す。再び彼の地を訪れる日の有る事を念願し乍ら。

一、原城と海の関係

有馬氏領有地には原城の外、支城が数ヶ所資料に見える。これは小野氏に詳しく触れない。

島原半島を総括して今一度次の略図によつて、海側から眺めた原城の位置を海との関連性を懐古してみると、



ることができると思う。

その証左に、常陸国水軍の系統を引く有馬経純を地頭として起用したことが考えられる。

以上、原城と海との接点を思いのままを述べてみた。当然、豊後海にも傍例はある。海の戌(護)、船所(船倉)烽火(狼火)等を設置したと史書は伝えている。佐伯湾にもそれらしき適合する所は幾多見受けられる。今後課題として研究したいと思う。

中世水軍の城、近世天草一揆の立籠もった原城を懐古し、次の雲仙普賢岳に向った。

すでに新聞、テレビ等の報道で知られた、水無川泥流による被害の生々しさ、「島原大変肥後迷惑」の文言通

建保元年(一二二二)常陸国(茨城県)より有馬庄口ノ津に、地頭職として補任された背景には、九州鎮西水軍の動勢を重視する鎌倉幕府の、西海に対する強い政策の一端を窺い知

り恐るべき噴火の跡を目前に眺め、島原を離れ海路熊本へ。更に高速道に乗り、無事帰着、良き旅であった。

小野・五十川・御手洗各氏有難う。

【参考文献】

- 日本の歴史(13)
- 小野氏資料
- 日本史辞典
- 日本史研究

簾山峠

直川村と弥生町の境(旧下直見村と旧切畑村の境)にある峠。国道一〇号が通る。標高約七〇メートル。藩政期には切畑口と呼ばれ、文化九年(一八一二)正月中旬、百姓一揆の舞台となった峠として有名。

すだれやま

簾山の峠道はかつては国道といってもカーブが多く、かなりの傾斜で、杉林の中を抜けて通っていたが、国道改修でカーブもかなり改善されている。更に、直川側の峠道に至る道路も丘陵地を開発し、曲折の著しい道路を大幅に改修して新道を開設している。(直川村誌)